

# 第6回 「日本語大賞」

テーマ

いま つた ことば  
「今、伝えたい言葉」



中学生の部 優秀賞 受賞作品 ありがとう（東日本大震災から）

宮城県

古川学園中学校

1年 佐々木 郁乃

ありがとう（東日本大震災から）

宮城県 古川学園中学校 一年 佐々木 郁乃（ささき・いくの）

私は、0歳の頃から強い食物アレルギーがあった。御飯と豚肉と大豆製品と一部を除いた野菜類ときのご類しか食べられなかった。従って、全く外食というものはできず、常に母の手作りのものしか食べられなかった。幼稚園や小学校でも給食は食べられず、常に手作りのお弁当を食べるしかなかった。友達と同じものは何一つ食べられなかったのである。私は、いつも友達と同じものを食べてみたいと願っていた。

そんな中で私が小学校三年の時、あの東日本大震災が起こった。私は教室で授業を受けていた。ガタガタガタガタと窓が揺れだした。始めはまたいつもの弱い地震が来たのだろうと思っていた。そのうちに揺れはどんどん強くなり、「机の下にもぐりなさい。」という先生の声が聞こえ、私達はやつとの思いで机の下に入った。あまりの揺れに、もぐっていた机が倒れそうになり、私は必死で机の脚を握りしめていた。いつもなら力を入れて開けている戸があまりの揺れの大きさにボタンボタンと何度も何度も開いたり閉じたりしているのを私はこわごわ見ている。もう泣き崩れている友達もいたが、私は必死に耐えていた。

何分何秒が経ったのだろう。私には三十分以上の長さに感じられたが、やっと揺れがおさまった。「校庭に移動します。」という先生の声が聞こえ、泣きわめく友達もいたが、ゆっくりあわてず小走りで校庭に避難した。その後、祖母が迎えに来てくれ、私は家に帰った。家に着いたら、私はもう安心だと思っていた。しかし、家に入ってみると、家の中には家具やガラス類、蛍光灯が割れたり、足の踏み場もないくらいグチャグチャになっていた。そんな中でも大きな余震が何度も何度もおそってくるため、私と姉と祖母は、三人で余震がくる度に何度も外に避難した。

夕方になって母が帰宅すると、水道も電気もガスも止まり、食料も暖もとれなかったため、近くの高校の避難所に移動した。ここでは、夕飯にレトルトの、米のピラフが配られた。もらおうと思ったが、私は食べられなかった。母は、家に残っていたご飯を持ってきていたため、その日私は、白いご飯だけを食べて過ごした。

次の日になって、朝食は菓子パンで、また私が食べられるものはなかった。皆一日二食で昼食はなく、その夜、炊き出しが行われた。母が炊き出しの手伝いをしていた。しかし、私が食べられるものは、ご飯しかなかったらしく、母は、味噌とキャベツをもらってきて、だるまストーブで、小鍋を使ってだしのないキャベツ入りの味噌汁の中にご飯を入れたものを作ってくれた。私は、震災後丸一日経ってやっとご飯以外のものを食べることができ

た。その次の日もその次の日も、母は頭を下げて少しの材料をもらってきては、小鍋で私だけのために味噌汁を作ってくれた。

決しておいしいとは言えなかったが、私は、自分だけのために頭を下げて作ってくれた母の姿がとても目に焼き付けられた。

これまで私は、自分の食物アレルギーという境遇をいつもうらんでいた。なぜ自分だけがいつも友達と違うものを食べなければならないのだろう。なぜ、自分だけがいつもいつも母の作るお弁当を持って学校へ行かなければならないのだろう。友達が食べる給食、周りの人が食べているソフトクリームやケーキはどんな味がするのだろう、なぜ私は食べられないのだろう。私は常にそのことばかり考えていたように思う。

しかし、この東日本大震災を通して私は、これまで0歳から食物アレルギーがあった私の食事を必死に作ってくれていた母の大きな存在に初めて気づくことができたように思う。私が食べられないため、母や家族も家では皆私と同じ食事をしてきていた。どんなに大変だったことだろう。どんなにつらいことだったのだろう。私は、そんなことに少しも気づくことができずにいたのだ。私のためにあんなに頭を下げ、あんなに必死で駆け回って食事を作ってくれた母の姿を見て、自分は食物アレルギーではあるが、どんなに幸せな人間であったのかということを実感できた。今ここで、母に初めて「ありがとう」を言いたい。私のためにいつもいつも頑張ってくれていた母への感謝の気持ちを込めて……。